

氏名・(本籍地)	朴 俊 奭 (大韓民国)
学位の種類	博士 (仏教学)
学位記の番号	甲第 59 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 16 日
学位論文題目	唐末中国密教と入唐僧による日本将来の研究
論文審査委員	主査 小 峰 彌 彦 副査 苦米地 誠 一 副査 齊 藤 円 真

## 朴 俊 奭 氏 学位請求論文審査報告書

### 「唐末中国密教と入唐僧による日本将来の研究」

#### 論文の内容の要旨

本論文は唐代末の中国密教の状況を、その時代に入唐求法をした日本人僧達の求法の事跡から明らかにすることを目的としたものである。朴氏は韓国における密教系の仏教教団に所属しており、本来ならば朝鮮半島における密教の移入と発展を明らかにすることが目標であるが、入唐八家と言われる日本人僧と同様に、同時期に入唐した新羅僧の現在に伝えられる記録・資料は、残念ながらあまりにも僅少であるにすぎない。また不空三蔵・善無畏三蔵などについては幾らかの資料が残るとはいえ、その後の唐代末の中国密教、殊に惠果和尚とその弟子達に拘わる直接的資料も、十分であるとは言い難い。それを補うものが、入唐日本人僧達の事跡・記録である。本研究はそこに着目し、八・九世紀の新羅僧が求法した唐末密教の姿を、日本に残された資料から探ることを目指している。

本論文の内容は、大きく「歴史篇」と「将来録研究篇」の二つに分けられ、「歴史篇」九章は、中国密教研究としての第一・二章と、入唐僧研究としての第三～九章に分けられる。

第一章「両部大経相承の密教伝説—『大日経』と『金剛頂経』をめぐって—」では、『大日経』の「供養法」に関する金粟王塔説・達摩鞠多受法説・猿猴相承説や、『金剛頂経』の南天鉄塔相承説と竜猛・竜智師弟などの諸伝承について、それらの伝説がどう理解されてきたかを検討している。中で『高僧法顕伝』などから金粟王所造の塔の具体的位置や、善無畏の鞠多付法説が、『善無畏三蔵碑銘并序』の中の「那爛陀寺において八百歳の鞠多を本師となした」という記述を根拠とするものであって、これは李華による創出が唐朝の胎蔵界相承の系譜における一つの根拠として用いられた結果であることを明らかにした、とする。

第二章「惠果和尚の研究」では、空海の直系の師である惠果（七四六～八〇五）の生涯について、出生から入寂までの彼の生涯全般を検討の対象とし、合わせて年表を提示し、考察している。胎金両部密教の創始者と目されるが、教理的なまとまった著作を残してはいない。事相的著作に惠果作を伝えるものもあるが、その真偽も未だ十分に研究されているとは言い難い。本章では著作における真偽の問題も検討の範囲内としている。

第三章「最澄の入唐求法」では、在唐中の最澄の行跡を逐う中で順暁—最澄の付法に着目し、善無畏—義林—順暁—最澄と相承された三部三昧耶について、善無畏系密教の付法相承の問題として検討している。また三部三昧耶を『破地獄儀軌』との関係の中で論じ、空海が請来した不空所伝の破地獄真言を取り上げ、三種悉地真言や『破地獄儀軌』とは系統の異なった伝承があったことを明らかにした。

第四章「空海の入唐求法」では、空海の入唐年次・入唐までの経過、空海を含む遣唐使ら一行が、遭難の末に福州に漂着し、入京するまでを検討している。中で福州の観察使として知られる閻濟美について、従来の見解が、史実とは異なる可能性を指摘し、観察使宛て書状の成立年時の上限を論じている。

第五章「常暁の入唐求法」では、これまで研究の無い常暁の入唐求法について考察している。特にその進官録である『常暁和尚請来目録』が、形式や内容を空海の『御請来目録』に基づいていることを検証し、また太元帥法の相伝をめぐって、元照からは金剛界法を受けたと論じている。

第六章「円行の入唐求法」では、やはりこれまで研究の無い円行の入唐求法について論じ、円行の持参した実恵の書状に対する、青竜寺円鏡の答書に「三部大法」の用例がみられることから、円行が入唐した当時の蘇悉地法の動向についてふれている。また各種の円行伝などに、青竜寺義真のより両部密教及び阿闍梨位灌頂を受けたと伝えられることについて、実際の両部密教の学習を保証するものではなく、胎藏界法のみでの付法とみられる、とする。

第七章「円仁の入唐求法」では、彼の自撰の記録である『入唐求法巡礼行記』を中心に、時間軸に添った記述となっている。また円仁は五台山巡礼中に靈仙の足跡を見聞しているが、靈仙は八家以前の入唐家の一人であり、しかも内供奉に任ぜられたと伝えられることから、靈仙の消息について言及している。

第八章「行賀の伝歴について——入唐年次を中心として——」では、『宋史』「外国伝・日本国」において、靈仙と同時に入唐したとされる行賀の伝歴を検討し、行賀は靈仙とともに渤海国の使節の帰朝船に同乗して宝亀三（七七二）年に入唐し、宝亀九（七七八）年に帰朝した、という推論を提示している。

第九章「恵運の入唐求法」では、恵運の帰朝を問題とし、『続日本後紀』収載の太政官符にある「円仁（等）五人を速やかに入京せしむ」の「五人」を、先に帰朝していた恵運・恵尊・義空に、円仁・性海を合わせた五人とする推論を提示している。さらに恵運の青竜寺義真からの受法について、『巡礼行記』をもとに、長安以外の一地方で受法した可能性を示唆している。

「将来録研究篇」は、第十章「安然の著作と『八家秘録』成立考」と「入唐八家将来録辞典」となっている。安然（八四一～九〇二〔一説に九一五〕）の『諸阿闍梨真言密教部類惣録』二巻は、入唐八家の将来した密教典籍の書目が項目別に分類されており、各書目には著（訳）者や該当書籍の伝来の事情に関わった注記が施されている。第十章ではこの『八家秘録』の成立に関わる諸問題を論じているが、先行研究の紹介に止まる感は否めない。しかし「入唐八家将来録辞典」は、計二一部の入唐八家の将来録及び『八家秘録』記載の書目すべてを網羅して比較・対照した結果を、アイウエオ順に配列し、各書目毎に「①訳（作）者名②秘録注記③将来状況④出典⑤備考⑥異名⑦現行本⑧従来の研究との対照」の項目を設け、平安初期密教における経典将来の事情を提示している。

## 審査結果の要旨

本論文は「歴史篇」と「将来録研究篇」の二つに分けられていた。

「歴史篇」では、真言密教の根本経典である両部大経（『金剛頂経』と『大日経』）の相伝の伝承について、中国に伝えられた諸説を検討し、空海の受法した師恵果和尚の伝記と、入唐八家のうち、最澄・空海・常

暁・円行・円仁・恵運の入唐求法の行歴を考察している。主として歴史学的な研究であるが、この方面には既に歴史学の立場から正史や僧伝を中心とした多くの先行研究が蓄積されている。しかし朴氏は、「もちろん精密な論考も一部みられるが、むしろ概括的な叙述を行い、一断面のみを示しているものが多く、いわゆる「入唐史」の展開ないし流れを一書にまとめるという試みは、それほどなされていなかった」とし、最澄・空海・円仁・円珍以外の入唐家については、物足りないと言わなければならないとし、「航海を主な手段としていた文物流通の時代を、密教の流伝における「人」と「物」という視点から考察していく」ことを本論文の目的として上げている。主として当時の歴史史料を丹念に当たり、先行研究を批判的に継承して研究を進めているが、特に最澄・空海・円仁の伝記研究については、佐伯有清・中野義照・武内孝善・小野勝年諸氏の研究をベースに、新たな見解を提示する所も見られる。

中で、第二章「恵果和尚の研究」は、恵果は胎金両部密教の創始者と目される唐末密教史上の重要人物であるにも関わらず、まとまった研究としては松長有慶・勝又俊教のみであった。その点で本論考は貴重なものと言えよう。ただし恵果伝の史料評価の問題や恵果著作の真偽問題に関しては、一部に疑問な点も見受けられる。

また第三章「最澄の入唐求法」で、最澄が順暁より付法した三部三昧耶について、善無畏系密教の付法相承の問題として検討したこと、また唐における最澄・空海の付法相承の内容を三部密教との関連性の中で究明しようとしたことは、これまでにない独自の視点による着目であり、高く評価されるが、しかしこれも第二章と同じ史料評価の問題に明確でないところが見られる。

第四章「空海の入唐求法」では、福州の観察使として知られる閩済美について、従来の見解を批判し、新たな解釈を提示しているが、また現在では偽作として取り扱われることの少ない『御遺告』の記述に史料的評価を与えていることは注目される。

第五章「常暁の入唐求法」、第六章「円行の入唐求法」、第九章「恵運の入唐求法」などは、これまでに先行研究の無い新しい研究であり、独自の成果である点は高く評価される。しかし資料的な制約から、必ずしも十分な結論を得たとはいえない面もあり、今後の更なる深化が求められる。

また第七章「円仁の入唐求法」に関しては佐伯有清・小野勝年・ライシャワー氏の分厚い研究が在ることから、多くそれらに拠ったものとなっている点は否めないであろう。

以上の「歴史篇」が九章であるのに対して、「将来録研究篇」が第十章の一章と、附録の「入唐八家将来録辞典」のみとなっている。このことからすれば、本論文を二篇に分ける意味は無いようにも思われる。しかし当初の予定では「将来録研究篇」は「思想教理篇」として、各入唐僧夫々の将来録から知られる密教経論の中国における流布・展開・偽作の問題、或いは将来経論の内容について、入唐諸家の教理思想の比較から、中国密教の思想的特徴について明らかにすることを目指すものであった。殊に円仁・円珍の教学における中国密教的要素の解明が課題とされていた。これは主として空海教学との対比を通じて行われる予定であった。しかし時間的な問題も在り、また課題が大きいこともあって、その基礎作業としての『八家秘録』を中心とした将来録の整理をするに止まったものであり、次の研究段階へ進むための課題を明確にするために、「将来録研究篇」として分けたものである。

全体として先行研究を良く参酌し、それらを一次史料に基づいて批判的に再検討する作業が中心を占めるといえよう。その史料の扱いは、概ね客観的で適切なものといえることができる。その中で、独自の新見解を提示してきた所が少なからず見られる点は高く評価される。またこれまで研究されてこなかった問題を取り上げてきた所も評価すべき点である。また「入唐八家将来録辞典」はこれからの密教経論研究の基

礎的資料を提供する地道な作業であったと言えよう。一部に誤解と見られる箇所も指摘できるが、全体の評価を傷つけるほどのものではない。当初の研究目標からすれば、その一部にしか過ぎないとも言えるが、その目標そのものが、言ってみればこれから生涯を懸けて取り組むべき大きな目標とも言うべき内容であり、この課程博士論文によって、朴氏が将来的にその目標を達成できる能力のあることを示したことは、評価される点であろう。課程博士論文として認めるに十二分な内容であると言えよう。